

視覚詩の多方向性と多焦点性がもたらす漢字の共鳴

東京藝術大学大学院美術研究科

美術専攻デザイン研究領域

大谷陽一郎

論文要旨

本論は、従来の文字組みでは得られない文字同士の繋がりを探求するため、活字を用いた視覚詩を研究対象とし、萩原恭次郎と新国誠一の詩、自身の漢字を用いた作品を通して、多方向性と多焦点性という二つの観点から文字構成を考察したものである。ここでの多方向性は個々の文字や語句における接続のベクトルが縦横斜めへと四方に開かれていること、多焦点性は文脈や隣接する文字を越えて異なる座標に位置する文字や語句が接続し合うことであると定義した。一般的に私たちが文字を用いる際、統語構造に従い順序的に文字を配列することで、文の流れを定める。一方、視覚詩では程度の差こそはあるもののタイポグラフィを応用することで習慣的な文字列から文字を解放し、二次元空間のなかで視覚的に文字を配する。文字列の方向性は曖昧になり、個々の文字、語句は独立する傾向を強めると同時に多方向的、多焦点的に結びついていく。結果、文字がもつ形態、音節、意味の要素が相互的に作用し合い、従来の文字列とは異なる文脈が立ち現れる。

筆者はこれまで漢字を用いることで視覚詩をつくってきた。アーネスト・フェノロサが漢字を「思想絵画」と呼んだように、悠久の歴史なかで文字体系を合理化せず複雑化させてきた漢字には、自然や人の姿、ものや情感がそれぞれの形に含まれている。大量複製するために整えられた活字としての漢字もその形の流れのなかにあるといえる。そのような漢字を多方向的、多焦点的に繋げて共鳴させる場を生み出すために筆者は作品を制作してきた。博士展提出作品である ki/u では、その繋がりを可能な限り追求することを目指した。

本論は6章で構成される。第1章では、視覚詩の定義を振り返った上で、ステファヌ・マラルメの『骰子一擲』、ギョーム・アポリネールの『カリグラム』、オイゲン・ゴムリンガーの詩を取り上げて、アルファベットを用いた視覚詩の多方向性と多焦点性について分析している。

第2章では、大正末期に発表された萩原恭次郎の『死刑宣告』を取り上げ、文字のサ

イズや書体を操作することで作られた不均一な文字構成を考察した。『死刑宣告』で多用される「●」などの記号活字や活版印刷との関係を先行研究で見ていった上で、詩集のなかでも文字列の揺動が極めて激しい詩である「日比谷」を取り上げた。線行を維持しながらもその不均一性から生まれる多焦点性が詩にどのように作用するかを明らかにした。

第3章では、1960年代より日本の具体詩運動を率いた新国誠一を取り上げた。新国の活動を俯瞰することで、彼の詩の変遷を辿った。画面と線行のはざままで揺らぐ視線の動きと、新国の詩から導かれる漢字の特質を探った。その上で、テキストとテキスタイルが共通の語源をもつことから、縦糸と横糸を一定の規則で交互に織る織物構造を、新国が1960年代半ばに作ったグリッドを基礎とする作品に当てはめて、多方向的な性質をもつ詩の構造を分析した。

第4章では、「キ」と発音する漢字を集積させて山々を描いた筆者の修士課程の修了制作である《キ》を取り上げた。使用漢字がどのような意図で選択されたかについて言及し、作品の軸となる「キ」という発音をもつそれぞれの漢字の特質を明らかにした。

「木」という漢字が組み合って「林」と「森」という会意文字ができるということに注目し、「木」という漢字に潜在的に込められた増殖性について述べた。次に「気」という漢字と中国の芸術理論や山水画との関係について考察し、「気」という漢字に込められた流動のイメージについて言及している。第三に、この作品で用いたその他の字がどのような意図で選択されたかについて述べ、山々に対する日本古来の眼差しと「キ」と発音する漢字の関係について論じた。《キ》における文字、音声、意味の連関について分析した上で、多方向性と多焦点性を考察した。

第5章では、2020年に台東区上野桜木にある旧平櫛田中邸で展示した筆者のインスタレーション作品《計に景》を取り上げ、制作意図や制作過程について振り返りながら、文字単体と文字が画素となって生み出される図像の関係を、鑑賞者の立ち位置という身体性による影響を踏まえ述べた。また、《計に景》と萩原恭次郎の《日比谷》、新国のグリッド詩との比較を行い、それぞれの作品の特質を明らかにした。

第6章では、無数の大小の活字をグリッド上に配置することによって雨を描いた博士提出作品《ki/u》を通して、可逆的な線行における多方向性と余白が生み出す多焦点性について分析した。それらの性質がもたらす漢字の相互的な作用について、共鳴というキーワードを通して論じたあと、終章で本論のまとめと今後の展望について述べた。